
夕暮れ

杜若

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕暮れ

【Nコード】

N7852B

【作者名】

杜若

【あらすじ】

身分チガイの恋は告白すら許されないのです

(前書き)

出来るだけ短く、
かなわぬ恋を語ってみることに
挑戦しました

12月の風は容赦がない。年中色の変わらない竹の葉すら引きちぎり枯れた色に変えてしまう。

かさかさ、かさかさ。乾いた泣き声をあげる笹の葉を踏みしめて美代はきゅっと唇をかむ。

きつと、さぞかし醜い顔をしているのだろう。

「祝言が近いというのに、どうしてそのような険しい顔をしているのです」

京都からとついで来た母は、娘が嫁ぐ年になっても上方なまりが抜けない。

江戸の言葉より、ずっとまろやかでやさしい言葉でそういわれて美代はいたたまれずに庭に飛び出した。

中庭の片隅、お稲荷さんを囲むようにある小さな竹やぶ。

ここならめったに使用人も来ないから、小さい頃から叱られるたびに美代はここに来て泣いた。

泣いた顔が見られるのが嫌ではなく、泣いた自分の顔を見て悲しむ人を

見るのが嫌だった。

「先方さんはうちよりも大きなお店だけど、御主人が苦労人だからおごった所なんて少しもなくて、いい人たちだよ。それに奥様はもう亡くなられているし」

縁談が持ち込まれた時、母はまるで自分が結婚するかのように喜んだ

「お前は本当に幸せものだ」

そう、確かに私は幸せものだ。

声に出さずに美代はつぶやく。

表通りに店を構える大きな商家の一人娘に生まれ、大切に育てられた。

同じ年頃の下働きの子が手をあかぎれだらけにして、雑巾がけをし

ている間

私は振袖を着て、手習いや針の稽古にかよった。

よく顔もしらない相手に嫁ぐのは、お稽古仲間達もみんな一緒。

やさしいという評判が町がちがう我が家にまで聞えてくるようなお家で、

どんないい人でも嫁にとっては小うるさい姑がないのは、本当に運がいいことだ。

幸せ、幸せ。私は本当に幸せ。

「私は、幸せだ」

でも、なんで幸せという声は今日の風みたいに冷たく、ひび割れているのだろう。

どうして、幸せと言うたびに心が重たくなり、顔は陰しくなって母が心配するのだろう。

「お嬢さん」

かけられた声に、美代は振り向く。

美男というわけではないが、人のよさそうな顔の青年が困ったような笑みを浮かべて

立っていた。

「また奥様に怒られたんですか」

「違うわよ、佐吉。ちよっと喧嘩をしただけ」

そう言いながら、美代は足元の小石をける。

佐吉の困ったような笑顔が深くなった。

「お嬢さんは知らない所に嫁ぐ前で、ちよっと不安になっているんですね」

それは違うわ。佐吉

「私もここに奉公に上がる前は、色々と悪い想像をして不安で眠れなくなっただけです。」

大丈夫。案ずるより生むがやすし、というじゃないですか。」

私は嫁いだ後のことを想像することすらしていないもの。

「お嬢さんはきっと大丈夫です。小さい時から見ている私が保証し

ます。

さあ、そんな顔をしていると幸せが逃げてしまいますよ」
お前まで、私を幸せと笑いながら言うの。

「佐吉、そう言うなら嫁ぎ先まで一緒に来て。私が本当に幸せになれるかどうか

見ていてよ」

佐吉の困ったような笑顔が固まった。

「冗談よ」

美代はぷいと横を向いた。

「風が冷たいです、中に入りましょう」

しばらくして聞えた声は、ふき続ける風のようにだった

佐吉は小さな竹やぶの中にいた美代に声をかける前

自分の頬を両手で挟んで笑っているかどうかを確かめた。

お嬢さんは幸せになる。だから、私も幸せだ。

「お嬢さんは知らない所に嫁ぐ前で、ちょっと不安になっているんですよ」

その言葉に、美代の顔はますます険しくなった。

そんな顔をしないでください、お嬢さん。

お嬢さんの祝言を、お嬢さんが嫁ぐ見知らぬ男を恨みたくなくなってしまふ。

「佐吉、そう言うなら嫁ぎ先まで一緒に来て。私が本当に幸せになれるかどうか

見ていてよ」

できることならそうしたい。と佐吉は思う。

雛人形のように愛らしい頃から見つめてきた、宝物のお嬢さん。

見つめることだけでも許されるなら、老いて死するまでそばにいたい。

決して叶えられず、口にすることも許されない願い。

ああ、いつそこの冷たい風に二人そろって巻き上げられてしまいた

い。

佐吉の顔はただ、笑顔を作る。

口先だけで「大丈夫」とくりかえす。

「風が冷たい、中に入りましょう」

その言葉に、美代は小さく頷いて歩き出す。

一歩さがって佐吉が続く。

沈みかけた夕日が、二人の影を長く伸ばす。

家に入る一瞬、

伸びた影は重なって抱き合うような形になったが、それを二人が見ることは、なかった。

(後書き)

出来ましたら感想お願いいたします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7852b/>

夕暮れ

2010年10月10日07時03分発行